

老人の勤労観 その4 —学歴別、生活態度別による考察—

和洋女大又家政 ○酒井ノブ子

金藤短大 篠原 冬

目的 前報までに引き続き、本報では老人の勤労観について、学歴別、生活態度別によりそれぞれによる違いを明らかにしようとするものである。

方法 学歴は前報と同一の対象を小卒（男60人、女66人）中・女卒（男98人、女180人）専・大卒（男84人、女53人）に分類して検討し、生活態度は埼玉県八潮市老人福祉センター利用者（男93人、女147人）を受動的なグループ、千葉県老人大学校生（男144人、女152人）を能動的なグループ、として検討した。調査時期、項目は前報と同じである。

結果 学歴別では、ほとんどの項目に有意差が認められ、高学歴になるほど、仕事・勉強、自己の向上を生きがいとしていた。また働くことに積極的な姿勢を示し、働くことは社会人の役割であると認識しており、働くならば「能力が生かせる仕事で、世評の高い仕事を望んでいた。また余暇は自分の向上をはかる時間と考えている人が多かった。これに対して、低学歴者は子や孫の成長を生きがいにするものが多く、余暇は人とのつきあいを理める時間と受けとめている人が多かった。またこの他、社会の人びとの行動に対する評価的な項目については、低学歴者ほど判定しがねているものが多かった。

生活態度別では、4項目以外に有意差が認められ、主な違いとしては、能動的なグループは、相手を尊重して生活すべからずと考えている人が受動的なグループの2倍以上の率に達していた。また、受動的なグループは働くとしたら、収入の多いところを望む傾向が強く出ていた。この他の項目では、能動的なグループは高学歴者の考え方と、受動的なグループは低学歴者の考え方とほとんど同様の傾向を示していた。